

覚鑊の教学に見る教判論

——第八住心を中心に——

大 鹿 眞 央

覚鑊は平安後期に活躍した東密の学匠であり、『五輪九字明秘密釈』を著し、浄土・阿弥陀信仰を密教的な観点から再解釈したことで良く知られている。また、それまで廃絶していた伝法大会を高野山に復興した碩学でもあった。小稿では、特に第九住心との関係を念頭におきつつ、覚鑊の著作に見られる第八住心に関する教相判釈を中心に論ずる。

そもそも空海は、天台宗を第八住心に配当して「如実知自心」・「空性無境心」⁽¹⁾と称するとともに、「於諸顯教」是究竟理智法身^{ナレド}、望^ニ真言門「是則初門」⁽²⁾と説明し、第八・第九住心ともに「無明辺域、非^ニ明分位」⁽³⁾と表現している。しかし、華嚴宗を第九住心に、つまり、天台宗よりも上位に位置付けた理由については十分な説明が為されていないようにも見える。このような十住心の配当に対して、天台宗からは激しい論難を受けることとなり、特に安然からは「十住心の五失」⁽⁴⁾を挙げて、天台宗は真言宗とともに華嚴宗の上位に据えられるべきであると痛烈に批判された。

それ故、後代の東密においては、十住心における次第の根拠を明確にする必要に迫られ、古義派・新義派を問わず、「八九浅深」や「空性極無二心浅深事」という論題のもとに、様々な宗義決択書や論義書で論じられることとなったのである。

「八九浅深」における古義派の論点は、第八・第九住心のどちらが深教であるかを論ずる点にある。これに関する文献としては、覚鑊没後二百年頃に活躍した東寺の杲宝が記した『杲宝私抄』⁽⁵⁾巻七や、高野山の宥快門下が編纂したとされる『宝門の論義書』『宗義決択集』⁽⁶⁾巻一九、寿門の印融撰『杣保隱遁鈔』⁽⁷⁾巻一七等が挙げられる。そこでは、難方・答方ともに両宗の教義を対照して天台宗・華嚴宗の浅深をはかっている。難方は、安然からの論難や『法華経』及び『大日経疏』を依用して天台宗の甚深なることを主張し、答方は『大日経疏』や空海の著作を依用して華嚴宗の優位を主張するのである。それに対し、新義派では、根来山の聖憲撰『大疏百條第三重』⁽⁸⁾巻九に説くが如く、第八・第九住心所断の煩惱は同一か

否かが論点とされる。この論義は、『大日経疏』卷二の第三劫段における断惑についての記述が、第八住心に相当する「第三重微細百六十心、煩惱業寿種除」⁽⁹⁾の一文のみであり、第九住心の断惑が説かれていないことに端を発する。問者は第八・第九住心の「俱一乗教」であることを根拠に断惑の同一を主張し、答者は十住心の次第を根拠にして断惑にも浅深があることを主張する。つまり、新義派の論義では、天台・華嚴を対照して両宗の浅深を論ずることはなく、むしろ答者においては、空海が第八・第九住心に天台・華嚴を配当していること自体が、断惑における浅深の有無を決する論拠となるのである。このように、古義派・新義派ともに「八九浅深」を論ずれども、議論の焦点は各々異なる。

覺鑊が第八・第九住心の教判を論ずるのは、ほぼ『覺鑊聖人伝法会談義打聞集』（以下、『打聞集』）に限られる。以下の文章は、二教論談義における記述である。

十住心大都、第二・第三、一種^ニ。人因、天果。雖^レ然、有^ニ浅深。故分^レ二。

声聞・縁覚〔又因〕果。同小乗故又一種撰。他縁・覺心又因果。同菩薩乗故又一種立。一道・極無又因果。同仏乗故又一種撰。

雖^レ然、皆有^ニ因果・浅深。故分^レ二。不^レ見^ニ此三義。安公、同一種阿闍梨^ト。如何^ソ浅深^ヲ分者非^也。

文章を読むと、各住心が小乗・菩薩乗・仏乗という区分に配当され、その中で一道・極無即ち天台・華嚴は因・果の関

係で論じられている。因果・浅深の区別がある故に二分すべきところを、三種の因果・浅深の義を見ない安然是、これらを同一種の阿闍梨とみなしている、どうして浅深を分かつ者を非とすることがあろうか、と覺鑊は安然を批判するのである。⁽¹¹⁾

各住心における因果・浅深を明確にすることは、覺鑊にとつて特に重要なことであつたようである。『打聞集』十住心論第九談義にも「十住心中、人因・天果、声聞因・縁覚果、他縁因・覺心果、一道因・極無果、極無因・秘密果」⁽¹²⁾として、一道・極無は因・果の関係で論じられている。また、直後に「如^レ是豎差別日、直第九心為^ニ第十心^一成^レ因。是故三句中、菩提心為^ニ因句撰^レ之。余心不^レ被^レ撰^レ之。（中略）直為^ニ秘密莊嚴^一為^レ因。除^ニ此菩薩、余菩薩・余法門無^ニ此義^一也。」として、第九住心である華嚴宗は、余の菩薩・余の法門と明確に区別され、華嚴宗のみが上位と目されるのである。右の文章において、『十住心論』卷九で第九住心を説明した「等空之心、於^レ是始起、寂滅之果、果還為^レ因。是因、是心、望^ニ前顯教^一極果。於^レ後秘心^一初心」⁽¹³⁾の文章及び卷十の「云^ニ心統生之相諸仏大秘密我今悉開示^一者、即是豎説。謂、從^ニ初羝羊暗心、漸次背^レ暗向^レ明求上之次第^一」⁽¹⁴⁾の文章が大きく関係していることは論を俟たないところであろう。即ち覺鑊は、『大日経』住心品所説の「心統生」⁽¹⁵⁾の句に対する空海の「求上之次第」

という解釈を根底に置き、第九・第十住心における因・果の構造を、各住心の次第に応用しているのである。⁽¹⁶⁾

以上の文章を鑑みるに、覚鑊においても、第八・第九住心のどちらが深教であるかという議論は無視できない問題であり、天台宗からの論難に反駁するためにも、第八・第九住心における次第の根拠を明確にしておく必要があったと考えられるのである。

さらに、『打聞集』十住心論第七談義に興味深い記述がある。

大略十住心教、有徳・失二義也。吾住心内不悟極、次住心悟極也。天台宗、法華不知尽。華嚴、華嚴不悟尽。真言、真言悟極。所謂華嚴、仏慧法華。法華、開會法華云云、是也。仏慧法華、高山頓設、大機前二有ノマニ説、故深。開會法華、漸機ヲ誘ヒテ説、故浅。雖レ然、同シク一乘義ヲ説ク故、初後共法華ト云義有。

ここには、覚鑊独自の教判論とも呼ぶべき思想が説かれている。即ち「吾が住心内に悟り極まらず、次の住心に悟り極まる」と説き、それ故に天台宗は『法華経』を知り尽くさずと説くのである。また、天台宗の法華（法華教学）を開会の法華と称して浅略とみなし、華嚴宗の法華（同教一乗）を仏慧の法華と称して深秘とみなしている点も重要である。

就中、右の文章で最も注目すべきは、天台宗の法華について「漸機を誘いて後に説く、故に浅し」と評していることである。これに関連して、『打聞集』十住心論第九談義にも「此

覚鑊の教学に見る教判論（大 鹿）

第九住心所依経中説、同教一乗、他受用身所説故、別教一乗、同会同所ニシテ説クガ故深。為二十地菩薩説故又深。次為漸機、四十余年方便誘引、為三乘利益説。法華経、同第八住心云、浅也。応化身所説、為三乘等説故云」と説かれて⁽¹⁸⁾いる。つまり、『華嚴経』が他受用身による十地の菩薩の為の頓説であるのに対して、『法華経』は漸機即ち二乗を誘引した後に、応化身によって説かれた三乗の為の教説であるため、天台宗の法華は浅いと断ずるのである。ここには二乗作仏を低く評価する姿勢がうかがえる。二乗作仏に関しては、『宗義決択集』においても議論の俎上が上がっていて、難方が「以爾前四味三教称方便教。就此雖有多種所由、大旨分レ二。一、不説如来久成之旨。二、不演二乗作仏之理。」⁽¹⁹⁾として、天台宗の優位を主張するのに対し、答方は以下のように反駁する。

然先言於爾前無二乗作仏及如来久成之説、故華嚴則浅、恐非理。(中略)

華嚴一宗意、不_レ必以二乗得益_レ為中美談也。其故、自元高山頓説_レ教故。以_レ頓大機_レ為_レ所被也。(中略)何以_レ救_二一乘_一為_二法華_一是深教_一乎。爾者、無_二二乗作仏之文_一者、却是華嚴所_レ以甚深也。⁽²⁰⁾

右の問答を見ると、答方は二乗作仏の文を重視せず、むしろ『華嚴経』にそれが見られないのは、却って『華嚴経』が甚深である理由になると説くのである。新義派の派祖と目さ

れる覚鑿の二乗作仏への理解と古義派の論義とに共通するものがあることは一目に値しよう。

以上、覚鑿における第八住心に関する教判の様子を概観してきた。覚鑿においても、第八・第九住心のどちらが深教であるかという議論は無視できない問題であったと考えられ、空海の教説を遵守するという結論は動かないにしても、第八・第九住心における次第の根拠が論じられている。また、覚鑿は「吾が住心内に悟り極まらず、次の住心に悟り極まる」という独自の教判論を展開し、漸機誘引や二乗作仏の所説を以て天台宗を低く見るといふ解釈を示す。このような解釈は後代の古義派の論義にも伝わっていたのであり、八九浅深の議論における展開の一端がここにも見て取れるであろう。

- 1 『秘密漫荼羅十住心論』巻八（弘全一・三五六頁）。
- 2 同右（弘全一・三五八～三五九頁）。
- 3 『秘藏宝鑰』巻下（弘全一・四五九頁及び四六五頁）。両箇所ともに『釈摩訶衍論』巻五（大正三二・六三七頁下）における五重問答からの引用である。
- 4 『教時問答』巻二（大正七五・四〇二頁上～四〇三頁下）。
- 5 『杲宝私抄』「空性極無二心浅深事」（『真言宗全書』（以下、真全）二〇・一〇八頁下～一〇二頁下）。
- 6 『宗義決撰集』「八九浅深」（真全一九・四三八頁上～四四九頁上）。
- 7 『杳保隱遁鈔』「八九浅深事」（真全二〇・四三九頁下～四四二頁下）。

- 8 『大疏百條第三重』「八九浅深」（大正七九・七四一頁下～七四三頁中）。
- 9 『大毘盧遮那成仏経疏』（大正三九・六〇四頁上）。「大日経義釈」巻三（統天全、密教一・六六頁下～六七頁上）。
- 10 『打聞集』（興全上・四一～四二頁）。
- 11 安然からの論難について、覚鑿は『真言宗義』の中で『大日経』三劫段に関する問題に絡めて詳細にこれを論じ、会通を図る。覚鑿による会通に関しては、『智山学報』六〇収録予定の拙論「覚鑿の教学に見る三劫段理解」参照。
- 12 『打聞集』（興全上・五三五頁～五三六頁）。
- 13 『十住心論』（弘全一・三七〇頁）。
- 14 同右（弘全一・三九七頁）。
- 15 『大日経』巻一（大正一八・二頁上）。
- 16 『打聞集』では他にも「一道無為猶是能破ナレバワロシ。極無自性、所破ニ不レ対、但無ニ能破・所破義。是殊勝也。」（興全上・四五八頁）及び「第八住心、三乘非、一乘是。是非争論故猶其執アリ。爾、浅。第九住心、都無自性緣起之諸法即真如ト習ヒ、事事円融義之妙也。」（興全上・四〇八頁）等と述べて、華嚴宗を高く評価し、天台宗を低く評価する記述が多く見られる。
- 17 『打聞集』（興全上・四八六頁）。
- 18 同右（興全上・五四一頁）。
- 19 『宗義決撰集』（真全一九・四四八頁上）。
- 20 同右（真全一九・四四九頁上）。

〈キーワード〉 覚鑿、第八住心、八九浅深、二乗作仏、打聞集
（早稲田大学大学院）